2023年3月12日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

イエスはろばの子と共に

［ルカによる福音書19章28～38節］

「イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。ろばの子をほどいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどくのか」と言った。二人は、「主がお入り用なのです」と言った。そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光。」

［1］　いま一つ分からない「エルサレム入城」

主イエス様は、そのご生涯の最期、エルサレム郊外の丘の上で十字架にかけられ、死なれる訳ですが、今日の聖書の箇所は、そのエルサレムに入って来られた時のことを語っています。よく「エルサレム入城」と言われる箇所です。このエピソードは少しづつ描写の仕方は異なりますが、どの福音書にも記されています。それだけイエス様のご生涯を見る時に大事な箇所ということなのだと思います。

ただ私はどちらかというと、この記事はあまり良く分からないなぁという印象を持っているのです。物語の筋としてはよく分かるんです。情景も、目に浮かんでくるようです。ただ良くわかないというのは、今一つしっくりしないんですね。イエス・キリストはろばの子に乗ってエルサレムに入って来られ、それを周りの群衆たちが喜び迎えたと。では何故「ろばの子」に乗ってなのか？と言うと、それは旧約聖書の預言に、来るべき王はそのような姿で都に入ってると書かれているからなのだという解説がなされます。そして、イエス様は、柔和な方であり、また平和をもたらす王であるので、勇ましい軍馬に跨ってではなく、子ろばの背に運ばれるように都に入ってくるのは、イエス様に相応しいことで、それを群衆は喜び迎えた、というように説明されます。確かにそうなのでしょうね。ただそれだけだと、何というか、納得しておしまいという感じになってしまって、今ひとつ心に響いて来ないのです。私だけかもしれませんけれども。

[2] 王が子ろばに乗ってやってくる

ルカによる福音書は、どちらかというと簡潔にこの物語を記しています。例えば、皆がこぞってしゅろの枝や葉を振ったりするその中をイエス様がお通りになるという描写はありません。ただ、もしかしたらこれは大事なことなのではないかなということを書いています。それは、イエス様がお乗りになったろばの子についてなのですが、このろばの子の登場は、たまたまでも偶然でもなく、それは、神様が特別に用意して下さった「主がお入り用なのです」と語られているほどの存在として位置付けられているということです。

旧約聖書でも、この部分は、「ろば」ではなく「らば」なのですが、あのダビデが、老年になり、王の後継者をソロモンを立てたという記事に中で、ソロモンをらばに乗せて民衆に「ソロモン王、万歳！」と言わせたという所があります。（列王記上1:38以下）。これはユダヤ人にとって、ダビデ・ソロモンという欠くべからざる人物に関することで、「王の入城」というとこの光景がすぐに思う浮かんだと思います。しかしここでは「らば」です。「らば」は、雌の馬と雄のろばの雑種であって、ろばよりも丈夫な動物だそうで、性格も従順でまた賢いそうです。

ところが、イエス様がエルサレムに入って来られた時に、敢えて用いられた動物は、「らば」ではなく「ろば」です。しかも「子ろば」。これは、旧約聖書「ゼカリア書」の9章このような預言が記されていて、それをイエス様もよくご存じであったからだろうと言われます。

「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ろばに乗ってくる。雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」（9:9-10）。

これはどうでしょう、今の時代でもそうですけれども、一般的に理解しがたい話ではないでしょうか。王様が「子ろば」に乗ってやってくる。そんな王様、何かあったらひとたまりもないじゃないですか？国は力のバランスを取り、抑止力になるものを備えようとするのが常識かも知れません。そう、これはもう常識を外れているんです。イエス様のもたらそうとする国、神の国は、腕力のない国です。しかし、この時のユダヤ人たちは、社会的な英雄、奇跡を行うリーダーをイエス様の中に見て讃美をしているのです。ですから、やがてこれはすぐ失望に変わり、それでイエス様は十字架で処刑されてしまいました。人は熱狂しやすいですが、それは危ないことです。宗教や信仰だってそうだと思います。

先のゼカリア書の少し先を見ると、そのろばに乗った王がもたらす国が、実は単に社会的解放をもたらすものというよりも、もっと内面的なことを語っていることが分かります。ゼカリア書9章16節にこうあります。―「彼らの神なる主は、その日、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは王冠の宝石のように、主の土地の上で高貴な光を放つ」。この言葉は良いですね。神様が私たち自身を救い、また養って下さる。その国の宝石のように見なされ、その場所で美しく光っている、と言うのです。イエス様は「いと小さきものの一人」（マタイ25:40）という言い方をされましたが、どんな者も例外なく神様のみ思いの中に大切にされている、主がもたらす国とはそういう国なのですよ、と聖書は語っているのです。

その「神様の救い」ということ、それが「子ろば」に象徴されていると思います。この子ろばは、もともと神様によって備えられて、イエス様に呼ばれるのを待っていたのです。ですから「主がお入り用なのです」と持ち主に言えば、すぐに分かってくれる、という話になっています。不思議ですけれども、でも私たちもそうなのではないでしょうか？私たちが救われる、ということは、イエス様に呼ばれる、ということではないでしょうか？そして、呼ばれた私たちは、自分が自分のことをどう思おうが、神様の「宝」として、「高貴な光」を放つ存在にして下さているのです。そして、ろばさんには悪いのですけれども、「ろば」は「らば」よりも「使えない」とされる動物です。「ろばのよう」という言い方は、馬鹿にした感じがありますね。うすのろとか、足りない奴とか。しかし、イエス様は、ろば、しかも、ろばの子と、一緒になってエルサレムに入って来たかったのです。そこに「神の国」があるのだ、と。

[3] 主の宝として受け入れ、用いて下さる

私、つい最近、ろばが犠牲になって死んでしまう、という映画を見たんです。アイルランドの架空の小さな島が舞台になっている『イニシュリン島の精霊』という映画なのが、詳しくは話す時間もありませんが、50代位のいい年の酪農家の男が、これまで長年親友だった男から、もうお前とは話をしない、おまえは退屈な男だ、と言われてしまうのですね。そう言われた男は、とても純朴で戦闘的な所など何もない、いわゆる「良い人」なのですが、急に無視をされて傷つくのですが、またいつものように、その男に、パブでおしゃべりをしようよと誘うのですけれども、しかし男は、これ以上私に話しかけると、私は自分の指を一本づつ切っていくぞ、と、とんでもないことを言いだすのです。

ちょっとシュールでミステリータッチの映画なのですが、彼らのやりとりがエスカレートする中で、その純朴な方の男の、飼いろばが死んでしまうのです。

この映画で、ある評論家が、語っていたことが私はとても気になったのですが、私たちも、意味もなく無視をされたり、あるいは深い理由もなく、誰かを排除しているというようなことがあるに違いないと。そして、小さく思えた争いが大きな争いになることもあるではないか。戦争もそうなんじゃないか。私たちは結構置き去りにしているようなこと、例えば、あいつはバカだから付き合わないとか、やんわりと無視するとか、本当は仲良くしたいのに体裁上出来ないとか、自分の弱さのゆえに、罪の故に、放っておいたままの人や、課題があるのではないか、それをこの映画は、美しい風景の中で、限られた人間関係の中で描こうとしているのではないかと語っていました。なるほどなあ、と思いました。そして、そんな中で、純朴だが愚かな動物の象徴であるろばが、死んでしまうのです…。

福音書の記事の中では、このエルサレム入城において、イエス様とろばの子は、ひとつになっています。これが、「福音」ではないでしょうか!?　イエス様が支配される神の国には、ろばの子が「お入り用」なのです。それを差し置いた神の国はないのだ。私たちは、自分がろばだ、ということもまた真実だと思いますけれども、誰かをろばのように扱っていないか、そのことも問われていると思います。そして、イエス様はろばの子に乗って、もう戻らない十字架への道を前に前に、進めていくのです。これは一体何を意味しているのか、今、受難節を過ごす中、考えて行きたいと思いました。イエス様がもたらす救いの方法とは、私たちの頭の理解を超えたものだと思います。しかし、私たちも今、ろばの子のようにイエス様に繫げられているのです。これは本当です！私たち一人ひとりに「主がお入り用だ」と言って下さり、私たちを「宝」として下さっているのです。

お祈り致します。

主よ、今日の礼拝も守って下さり、感謝致します。私たちは自分のイメージする神様を心で描き、それで讃美をしたり、逆に失望してしまったりします。イエス様はそんな私たちをよくご存じで、その上で、ろばの子と一緒に十字架への道を進まれます。どうか私たちの罪をお赦し下さい。隠れた罪をどうぞお赦し下さい。私たちは本当に取るに足らぬいと小さき者です。でもそのような者を「主がお入り用だ」とおっしゃり、愛して下さるあなたと結びついて一歩一歩歩ませて下さい。主イエス・キリストによってお祈り致します。アーメン。